續花經集

卷之二十四

江苏工业学院图书馆
藏书章

鏡花全集　巻二十三　第二十三回配本（全一十九巻）

定價二千六百圓

昭和十七年六月二十二日　第二刷發行
昭和五十年九月　二　日　第二刷發行

著　者　泉　鏡　太　郎

發行者　岩　波　雄　二　郎

〒101 東京都千代田區一ツ橋二丁目五番五號
發行所　株式會社　岩　波　書　店
電話（〇三）二六二－四二一

印刷　三陽社　製本　松岳社

落丁本・亂丁本はお取替いたします

© 泉　名月　1975

目次

山海評判記（昭和四年七月）……一
斧琴菊（昭和九年一月）……三八五
薄紅梅（昭和十二年一月）……四三一
雪柳（昭和十二年十二月）……五六七
縷紅新草（昭和十四年七月）……六六三
遺稿……七一九

山海評判記

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

ゆふ浪　長太居るか　夜の蝶蝶　その呼聲　淺草がへり

山歸り　井戸覗き　一銚子　續井戸覗　合歡の葉かげ　紫

の桑　横川―柏原　いらたか　吉丁蟲　掛蓑　逢魔ヶ時

鰈　青帽女子　半日　半夜　姫沼綾羽　歌仙貝　廿三人の

馬士　白山の使者

ゆふ浪

これを、旅館の方からすれば、先づ第一に職業、姓名、年齢…到着の日時などからはじめる處だけれど、懐中は知らないが、柄も相當なり、年配だし、それに見聞のまゝを記すとして――やがて、此の篇には主要の人物に成りさうであるから、お客の方からお話をしよう。

客――旅館――と續けると、何うやら心持が道中らしく成る。…其處で、道の記は、(男もすといふ日記といふものを、女もして見むとてするなり。)ごろから、汁だ、鱠だと、直ぐ食ものに箸をつける事は、その昔の縉紳方をはじめ、江戸時代の文人騒客に至るまで、餘りしない事に成つて居る。勿論汽車の辨當の煮込のこま切の硬さを突ついたり、玉子燒の正體を怪しんだりする如きは、實際上品ではない。が、人間、何よりも食ふ事が大切である。

「申兼ねましたがね。」

と、客は座敷の眞中の座蒲團から、次の室の――女連がないから、錦紗にも友染にも、緋、朱

鷺など、扱帯、伊達巻の張合のない——衣桁の端に、敷居際にひたりと手をついた白髪まじりの小さな髷で、繭紬の羽織に、手織木綿の、質實なお媼さんを、女中頭、かと見やりながら、

「贅澤ぢやないんだけど、食ものに少し註文があつてね、洒落れたものや、粋なものは薩張頂戴出來ないんだが、料理をお指圖申すほどの智惠もなし、默つて我慢をして居れば腹が空くと云つた勘定でね……」

「えゝ、旦那樣、宿へ入らつしやいまして、お腹が空いては、飛んだことでございます。」

と眞顏で云ふ。

「其處でだ。魚は何があるだらう。」

「はい、はい、大抵分つて居りますが、一遍念のために聞いて見ますでございます。」

お媼さんは座敷へ入つて、—こゝの内のは知らないが、旅館の廣告に時々見える、卓上電話あり、と云ふ、あれを取つた。

時に臺所との應對で、お媼さんは、別館、別莊を兩翼に開いた、鴻仙館の元緊の隱居であることが知れた。

「……あゝ、あゝ然うかい、あゝ分りました。」

カチリと掛けて、

「つい通りでございますが、鯛――それに針魚がありあはせますさうで、鰒、赤貝……」
「おかみさん――其の鰒、赤貝などと云ふのが少々むづかしいんだよ。おはづかしいが。……鯛はありがたい、出來ます事なら、頭の處を一つ煮て貰ひたいんだが。」
「あら煮でございますね。」
客は額に手を當てた。
「恐れ入つた――いや、あら煮と云ふとね、船を漕出した處があるんでね。――矢張り海岸でしたよ。もう薄暗いのに、水脚を曳いて、渺々たる海を乘るのさ。」
お媼さんは敷居へ戻つて、支膝で、
「何ういふものでございませうね。」
「……あとで聞くと板前のは、もう三枚におろしてある。あら煮と云ふから、新鮮い上にも特別の誂へだ、とばかりで、生簀へ刎ねるのを掬ひに出たんだ。御祝儀も出ないのに、……面食つた事があるんですよ。」
お媼さんは、屈みなりに、胸の寛い襟を扱いて、
「ご串戲ばかり。」
「いゝえ、然も其が東京近間だつたんですからね、――能登は……遙々……遠いな、と豫て思つ

て居た處だから。」

こゝは、婆婆ッ氣な銀杏返しの女中だと、一言句あるべきを、克明に頷いて、

「ようこそ、其の御遠方をお出で下さりまして。お禮を申上げねばなりませぬ。まつたくの邊土でござりますが、料理番が東京へも修業に參つた事がござりますので、はい。」

「それは——宜く申して下さい。では、あら煮と潮か。あとは其の針魚を鹽燒と云ふ處で、野菜はお見つくろひと…飲めます。」

と莞爾しながら、

「お膳と一所に、お銚子を。」

「承知いたしました。先づご緩りなさりまして——唯今お浴衣を。」

汽車は、上野から急行で、この溫泉へ分岐する、要所で乘替へ、能登路を奥へ進みつつ、便宜で午前のうちに到着するのであるが、客は都合上、途中越中の泊で一泊りして來たから、最う日の四時さがりである。座敷へ通されると、見た處から黑い塗棧の、欽込の硝子にさへ、漫々と水が映つて、豫て聞く海の景色が、すぐ胸前へ透るばかり、見霽しは分つたが、五月中旬すぎといふのに、まだ風がつめたい。お媼さんと應對の間も、丸胴の桐火桶を膝へ引寄せたほどで、取つて置きの景色へ突如飛かゝらないで、心樂みにした意味でなく、まだ障子を開けなかつた。

これが爲に――男もすといふ日記――まで引出した次第ではないが、さて膳のものが極ると、肩が輕くなつたやうに、ほつとした顏をして、客は障子をさらりと開いて、

「佳いな。」

と云つた。

地圖だけの知識では、浪に横たふ能登島が、遠靄に、すつと縱に浮いて、三ケ口の瀨戸が瑠璃色にすら〳〵と絲のやうに靡いて、外灣へ通つて居る。此の絲で貫く狀に、島根の巖は、寄る浪と夕日の色に薄紫に霞んだ中に、小さく紅玉を刻んで、夜の其の漁村のかすかな燈をさへ思はせ、さし翳す手に、美しい渚の貝を蘇芳に染めて視められる。

目の下の內灣は、のんどりと水が曇つて、小波もないばかり、一面にほの白く、透かすと、青く流れて、薄雲に藍を包むだやうである。

餘り靜寂だと思ふまで、其の時、一點の舳も行かず、帆の片影もなかつた。

ホーホー、ホーホー

島蔭に櫓を漕ぐ舸か。

否、横庭の圍外に、すぐ明神の山がある、森の茂つた中で、木莵が最う鳴いた。

梢にたなびいた藤の花の眞上の空に、半輪の晝の月がほんのりと掛つて、奥二階の緣に彳んだ、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

欄干の爪尖へ、水が映りさうに、眞下の其處へ、たぶ〳〵と寄せて颯と引く。塀際の棧橋へ掛る靜な汐に泡の浮くのを、塵ひぢかと見れば、散つて浮いた波がしらの藤なのである。

裏木戸も、つい其處にある。小松、絲檜葉の間に、どうだんをあしらつた庭に、海に面した直ぐの土塀は、築き方が低いから、內へ立てば、塀越しに外が覗けさうだし、外を通るものは、肩が浮いて行きさうに見えて、遠い沖から末かけて浦波の不斷の穩かさが親はれる。其の辯、蒼穹に映る海の色が、樹の間に水の影を流して——植交ぜた淡い躑躅が漁火のやうにこぼれて居る。

水天の中に一物あり。

汀に蘆もなければ、隱れたとは思はれぬ。浪際の石垣に、ぴたりと引込んで居た船があつた。棧橋の根と、その石垣の四角な處へ、ヌツと泥龜のやうに首を上げた、尖り帽子の眞黑な面が、頤を擡げて嘯くが如く二階を見上げた。

「旦那、一遍乘つてくらつしやんかねえ、旦那。」

「今……いま着いたばかりだよ。」

「名所の机島から、なあ、筆染崎、瀨戸口なんぞは飯前だよ。」

カタ〳〵カタと發動機の音を立てると、青い舷がむく〳〵と鰭を振つて、藤の浪をパツと切つた。客は思はず、一禮して、

「義理にも、お世話になりたいが、又の、又の事にしようよ、船頭さん。」
「按摩――按摩は何うで、按摩……」
「按摩は何うですかね、按摩、揉療治い。」
ドス聲なのと、嗄れたのと、背後の障子にぶつかつて、廊下を、洞穴のやうに喚いて行く。
行くかと思ふと、小按摩の勘高いのが、すぐ後へ――
「按摩は何うですか、按摩です、按摩。」
「旦那さん……お浴衣を。」
「いや、これは忙しい。」
と、客は、振返つて島田髷の女中を見て笑つた。
こゝが武藏國だと、一寸江戸櫻とか云ふ處を、里山吹と云ひたさうに、頭痛膏を貼つた――誰にも苦勞はあるらしい、おつとりした二十ばかりの色白なのが、衣桁の傍のみだれ箱に、廣袖に、棒縞の浴衣を襲ねながら、
「お喧しいらつしやいませう。」
「何う仕つて、寂しいよ。陰氣なものだね。」
「ほゝほ、一向お愛想がございません、こんな地方ものでございますから。」

「これは御挨拶だ。——あとでお酌をしてくれるかい。頼むぜ、姉さん。」
「お氣には入りますまいけど……あの、まあ、おめしかへなさいまし。」
「いや、其の段はお手を借らずと可、太夫身支度は自分でする。……浴室も大抵見當はついて居る。しかし大構だね、御當家は——實に廣い。手拭をぶら下げて、けちなバスケットの石鹸を持つてと——野くれ山くれ行つたれば……迷子に成つたら、大きな聲で、きみを呼ぶから、長廊下をバタ〳〵と驅着けてくれたまへ。……あゝ、肝心の事だ、名は何と云ふんだい、きみは。」
「巳代でございますの。」
「佳い名だ、お巳代ちやん。」
「あら、ご覽なさいまし、汽船が入りました、ぽッぽッ煙を立てて。」
「……按摩は何うで、按摩、按摩、按摩。」

長太居るか

「——何の彼のと言ひましてもな、好ければ好い、愁ければ愁い、寂しければ寂しいで、旅行が一番であすてね——此の、樂みは……」

によろりと手を肩に掛け、頭をすつと引込めて、ぶる〳〵と面を振つて、

「これでも、私や、一昨年ぢや。信州善光寺へ參つたであすて――御大人。」

客は痩てゐるから、はじめから御大人を撲つたがる樣子である。――此の按摩だが、つか〳〵と入つて來て、「お療治を。」鐵瓶の湯は湧いて居る、次の室の火鉢の傍へ、其の衣桁から辷つた、ひだのない法衣の落ちたやうに坐つた時は、――晩飯がゆつくりと濟んで、微醉で居た客が、もう寢床に居て、ぎよつとして胡坐の膝を搾めたのであつた。

憚りながら半島の僻地と雖も、和倉は溫泉の都である。溫泉の都には、藝妓舞妓が白粉を湯氣に溶いて、づらりと居る。然るに揉みほぐしは附けたりで、半ば話對手に、祝儀の處を療治代で慰まうと云ふ量見方だから、祟られたものらしい。九時頃床を取つた處へ、と云つて、女中のお巳代に按摩を賴むと、前刻廊下を流したやうなのではなしに、越中の氷見から近頃此の土地へ渡つて來た、うまいと云つて流行るのが居る。今晩あたり閑靜だから、間に合ひませう。「でも、あら坊主のやうな人ですよ。」藝妓がはりの算段を洞察して諷する處ある如し。お巳代の手前も、今更引くに引かれない。「成程、內浦の產物ぢやあない。……外灣から顯はれたんだね、眞黑な大入道だらう、海坊主おもしろい。」と一杯機嫌で肱を張ると、「まあ、今に參りますから。」お巳代は笑つた。其が、次の室へ入つたのを見ると、眞黑な大坊主より一層驚いた變りやうは、頭から

白い小入道……白髪ではないが、すぺりと兀げて、頭が小さく額が廣く頤が痩けて居る。ハアト形の其の大な顔が又をかしな事には、いきなり胴から生えたやうに肩へめり込んで、頸が短い。……繪で視た西洋の惡魔のやうな、然も小男なのが、古鞄から白いエプロンと云つたのを、甚しい猪首だから——すぐに頤へ當てて、手首でしめて、さて、侵入し來つたのを視て、客は人づてに聞いた、稚い記憶を辿つた。

この邊では、雪達磨のかはりに、地藏形に雪を積むのを、荒坊主と稱へるが、樣によつて、肩から直ぐに顏に成る……殆ど頸脚のない事を女中は洒落て言つたのであつた。

其のくひ下つた、あだ白い顏をぬつと上げ、

「——御大人、それが私ばかり、盲目唯一人と云ふのであしたて。」

おのれを嘲けるか、人を嬲るか。舐めた笑で、

「あはッはッ、いや、亂暴と言へば亂暴、我武者羅と言へば我武者羅でな。」

「はなッから……つまり國を出る時からかね。」

客は卷莨の煙を下段に沈めて受けて居る。

「四人づれであすよ。氷見を出たのは。是がさ、隣縣新潟に、私ども同業の大會があしてな、四人……先づ委員に選ばれて、代表と云つた形、首尾よく任務を果しましたわと……何うぢやい、

こゝまで出掛けたものぢや、又と云うては成るまいが、善光寺へお參りを、と誘うたであすが、とひようもない、とか吐いて、的等、あはッはッ。」

揉む手に押立てた親指が、肩へ摺込んだ顔だから、耳の刎ねるやうに、ピチ〳〵と不氣味に動く。

「手搜りで信州の方を向かうともしませぬてね。同行の三人とも卑怯ものめ等、心まで盲目で居くさる。……私や、中年二十頃から見えなくなつたであすが、」——

もと石屋で、碎く、破る、削る、穿つ。……一念巖を貫く勢ひだから、と白の按摩服を搖ること、饂飩粉の散るが如く、杖のかはりに玄能を構へた氣で、いきなり新潟の停車場へ驅込んだが、——此の上野行は、午前一時、眞夜中に長野へ着いた。乃ち名だたる靈場だから、そんな時刻でも、ぞろ〳〵と下車するだらう、其の後へ着いて、澄まして、歩廊の……何うも確にあるらしい、勘定が……其の橋を渡らうと云ふ算段が、飛んだ當ッぱづれで、後にも前にも一人も下りたものがないと言ふ。……

「富山の反魂丹賣に貰つた名所繪でな……御大人——幼少の折に見たばかりの善光寺へ、ぽかんと降りたのであすから、燈だか、繪具だか、目の蕊がぐら〳〵と赤く成つて、何の事はない、御大人。……いや、はや、足もとは、丁と、其の比羅繪の端へ乘つたやうで、渡江の達磨樣ではな

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook